

氏名	浅野真也
学位の専攻分野の名称	博士（言語学）
学位記番号	甲文第94号（文部科学省への報告番号甲第341号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2010年9月8日
学位論文題目	Theory of <i>Wh</i>-Agreement: Aspects of Split Ergativity and Unaccusativity
論文審査委員	(主査) 教授 浦 啓之 (副査) 教授 久 米 暁 准教授 楠 本 紀代美 平 岩 健 (明治学院大学専任講師)

論文内容の要旨

浅野真也氏の学位申請論文は、様々な言語で観察される一見類似点の少ない統語現象が、文法的まとまりとしての節の中心となる語である complementizer が引き起こす一致の現象を一つの統語操作（これを「*Wh*一致」操作という）であるとみなして理論化することにより、現行の言語理論の枠組みの中で統一的に捉えられるということを示すことを目的とする。実証面においては、特に節内の主語要素が *wh*-疑問詞を含む演算子の移動と係わる時に、構文間で同種の文法制約が観察される現象を取り扱う。

本論では、この演算子移動に課される制約によって、演算子の節内での文法関係に従って述部動詞にある種の形態素が表れるということを示す。本論は、当現象で表れる述部の形態素を、演算子の移動に課される必要条件を満たすものとして演算子が文法的機能の変化を受ける際に起こる態変化の形態素であると分析し、当現象をもたらす統語的システムが人間言語の重要な側面を反映しているものであることを結論する。この結論の更なる帰結として、*wh*一致システムが、世界の多くの言語で観察される「能格性 (Ergativity)」を生んでいるメカニズムと同一のものであるということも導けることを示す。また、この文法システムが所謂「非対格 (Unaccusativity)」構造(を持つ構文)で表面化していることを示し、*wh*一致をもたらす文法システムが、実際に人間が生得的に備えた能力の一側面を担うものであるという結論の更なる証拠となす。

より具体的には、各章では以下のことが示される。1章では、オーストロネシア語族やイヌイット語、マヤ語族など、本論文で能格言語と呼ぶ言語における、態 (Voice) 形態素を用いた節形成と、それによる絶対格制限 (絶対格 (absolute Case) を受ける名詞句のみが演算子移動の適用を受けられる) のメカニズムとして、*wh*一致の適切な理論化を試みる。2章では、日本語の連体修飾節にのみ表れる結果状態を意味する「た」を含む節は、能格言語の節形成のメカニズムが係わっていることを議論する。3章では、能格言語の節構造は非対格構造であるという主張を足がかりに、インドネシア語やチャモロ語、トルコ語における *wh* 句の抜き出しの現象や、英語やチチェワ語の場所格倒置構文、フランス語の過去分詞の一致現象も、本論文の提案するメカニズムによって説明しうるものである可能性を提案する。4章では、本論が提案する *wh*一致理論をより広範囲の経験的事実により検証する。5章では、日本語の「対格・属格交替」も *wh*一致によるものであることを示す。6章では、本研究の理論が英語の形容詞的受身の形成にも関わるものであることを議論し、本研究の理論が、語形成や属性叙述の現象をも生むものである可能性を

追求する。

論文審査結果の要旨

浅野真也氏の学位申請論文は、日本語で観察される動詞接辞「た」が過去の意味を持たない現象と、それと非常に良く似た英語における過去分詞の形容詞的用法に対して、理論言語学による詳細な解析を試みることを分析の中心に据え、そこで与えた理論的提案を言語類型論的に親戚関係のない諸言語で観察される一見無関係に見える様々な統語現象にあてはめ、それらの現象全てには直接的には観察されないある一つの隠された統語的メカニズムが関わっているということを明らかにしようとしたものである。

日本語の過去の意味を有しない「た」の現象と英語の形容詞的過去分詞の現象とは、例えば以下で示されるもののことである。

(1) 曲がった道、晴れた日、etc.

(2) my *loved* one, a *gone* feeling, etc.

これらの例においては、過去（もしくは完了）の意味を含まない解釈が可能である。

本論でなされる分析をより具体的に言えば、上記の日本語と英語の2つの現象を含め、能格言語群と分類されるオーストロネシア語族・イヌイット語・マヤ語族などで観察される主語・目的語の文法関係の交替構文における動詞形態素と名詞の格変化に関する制限現象、インドネシア語・チャモロ語・トルコ語における *wh* 疑問詞の移動現象、英語・チチェワ語で観察される場所を表す前置詞（後置詞）句の倒置現象、フランス語の過去分詞がある状況下で示す目的語との一致現象、日本語の関西方言で観察される目的語格助詞「を」と連体助詞「の」がある状況下で交替可能である現象に対して、それらすべてには音には現れない節形成に関連する論理演算子の統語的移動と文法的一致が係わっているということを、これらに共通する統語特性を洗い出すことによって明らかにすることを試みている。

本論の最も評価されるべきは、論理演算子の文法的一致という仮説を提案することによって、以下の点を示したことである。浅野氏が本論で取り上げる過去の意味を有しない「た」の現象に関しては、もちろん従来より国語学・日本語文学で詳細に研究されているものである。従って、その現象面における諸特徴はほぼ遍く明らかにされているのであるが、本論はそれらの諸特徴の成立条件を理論的仮説によって説明できるということを示したのみならず、その理論的仮説を英語過去分詞の形容詞的用法に対してもそのままあてはめることでその諸特徴の成立条件も説明可能であることも示した。英語過去分詞の形容詞的用法にしても、その諸特徴は英語学の研究によって明らかにされているものであるが、その成立条件の理論的解析に関しては説得的なものがほとんど提案されてはいない。また、同様のことが、日本語の「た」の現象の理論的解析に対してもあてはまる。よって、これらの現象それぞれに対してある程度満足のいく理論的説明を与えるだけでも非常に評価できるのであるが、本論では両方共にあてはまる理論的に統一的説明が試みられている。このことは、二重の意味において従来の理論的研究を上回るものであり、本論で提案されている理論的仮説に経験的・数理的妥当性の欠如が多少存在したとしても、本論の価値を非常に高いものにしていくところであると言える。

更に本論で浅野氏は、日本語・英語におけるこれらの現象のみならず、上述のようにさらに多様な言語の広範な現象に対しても提案した理論的仮説が適用可能であると結論づけることによって、その仮説の経験的・理論的射程の深さ・広さを示すことに成功している。このように、広範な言語と現象に対して統一的な説明を与え得る理論的仮説の存在を示しその内容を明らかにしている点は国際的なレベルで見ても非常に高く評価できるというのが、本論文の審査員全員の一致した意見である。

このように、浅野氏の学位申請論文は極めて高い学術内容を持つものであるが、問題点が一切無いとい

うわけではない。本論は非常に広範な言語現象を取り上げるが故に、個々の言語・個々の現象のきめ細かな観察分析は疎かにされていると言わざるを得ず、取りこぼしているデータが若干散見される。また、多くの言語・現象にあてはまる理論的仮説の提案であるが故に、その理論内における数理的整合性を保つことは非常に難しく破綻が明らかな箇所も少なからずあり、これらの問題点の整備・修繕が今後の課題であると言える。しかし、これらは学問的に博士論文に求められるものを超えるより高いレベルの要求であると言え、本論の博士学位請求論文としての価値を損なうものでは決してない。

本論の審査委員四名は、論文の審査ならびに2010年8月4日に実施した口頭試問の結果から、浅野真也氏が本論文によって博士（言語学）の学位を受けるに値すると判断し、ここに報告いたします。